は、れけるも是非なし、天王寺や慶子の田くらは、隨分大切にして慶子家に傳へしと也、

〔茶人大系譜〕眞能（稱能阿彌、（中略）按、眞能仕足利家爲同朋事、蓋普廣院義敎將軍之時也、又造茶杓有名、是宗師造茶杓之初歟、）

〔茶譜十五〕一千宗旦曰、昔ノ茶杓削人ハ　春溪　周德　羽淵宗溫

右ノ三人上手ト云々、利休時代ニハ、慶首座ト云出家ニ上手有之、利休モ下削ハ此慶首座ニ削セシト云々、古田織部時代ハ、甫竹ト云者上手ニテ、織部モ下削ヲ此甫竹ニ削セシトヤ、小堀遠州時代ハ、一齋ト云則茶堂坊主ニ下削サセシト也、

〔茶話眞向翁（坤）〕いにしへ茶杓は象牙なりしを、紹鷗初て南都宗淸といふものに、竹にてけづらせしとなん、あさぢいもなどいひて節なし、居士（千利休）にいたりて、はじめて節をこめられし也、甫竹慶首座下けづりをなせりとかや、其後茶杓の上手ありて、利休、織部、遠州、石州、宗和など、夫々の風をよくうつしければ、茶を嗜むもの、我流々々の杓を、此ものにあつらへもとめし事にてありしに、是等の杓、後世にいたりて、皆其宗匠達の眞作に混じけるとぞ、又遠州の茶道逸齋といふ者けづりし杓おほく有は、寺町二條邊に、竹屋一齋といふ茶杓の上手ありしかば、いつとなく此者の作、逸齋作と相混せしと見えたり、又細川三齋翁茶道にも、一齋と云者有て茶杓を造りしが、此人百餘歲の長壽をたもちしとなん、

〔茶窓閒話（中）〕茶杓の作者　守德（東山殿時代）羽淵（守德が次）鹽瀨（羽淵が次）此三人は南都の住人なり、宗淸これも南都にて紹鷗の頃のものなり、かくれなき侘ずきの名家にて、茶杓を削る事上手なり、慶首座堺南宗寺の僧にて、利休同時茶道に名あり、茶杓上手なり、石川六左衞門尾州に住して茶杓を削る事上手なり、

〔茶人大系譜〕一尾一庵（江戸人、稱伊織、謂道高、造花筒茶杓有名、）

〔雍州府志（七土產）〕茶杓　採竹片掬抹茶、是謂茶杓、（中略）凡於茶杓專謂劉之、今洛下人依前作之摸樣而